

カント哲学は観念論か？ ——「触発」についての考察（1）

高橋 康 造*

Ist die Kantische transzendente Philosophie Idealismus oder nicht?

—— Eine Untersuchung über das Affektionsproblem Kants (1)

Kozo Takahashi

Abstrakt

Unserer Sprachanalyse der Kantischen Texte, besonders der “Kritik der reinen Vernunft” nach, darf die Wortabfolge ‘Ding an sich (selbst)’ nicht als die fixierte Phrase angesehen werden. Tatsächlich ist der Ausdruck ‘an sich (selbst)’ für sich allein, nämlich abgesondert von dem ‘Ding’ gebraucht. Ist dies so, kann man jene Wortabfolge als ‘Ding-an-sich’ niemals interpretieren. Dann kann man also den Eindruck verwischen, als ob rede Kant von der sogenannten ‘doppelten Affektion’ (Adickes) durch die empirischen Gegenständen und die transzendenten Dinge an sich. In meiner nächsten Abhandlung wird ich die Verhältnisse zwischen dem transzendentalen Objekt und der Affektion näher prüfen.

Keywords: affection, thing in itself, ‘an sich (selbst)’

序

カントが自らの学説を観念論よばわりされることを極端に嫌ったにもかかわらず、また自らの立場を「本当の観念論」、「本来の観念論」（Prol. IV, 374）¹⁾とか「経験的観念論」（A369）

などとは一線を画そうとしながらも、それでもなお、その超越論哲学を「超越論的観念論」（A491 B519）とか「批判的観念論」（Prol. IV, 293）とか「形式的観念論」（B519）と呼んで、「観念論」という語を捨てなかったのは、いささか奇異に思われる。この言葉を見捨てて、誤解を避けるためにも、自分の立場を別の言葉で表明する方が賢明であつたらうと思われるほどである。しかしそうさせなかったのは、彼の哲学の根幹が時空の超越論的観念性にあり、この観念性の故にカントは「観念論」という名称を捨て切れなかったのは明らかである²⁾。いずれにせよカントがこのように自らの哲学を「超越論的

平成8年10月18日受理

* 総合教育センター・助教授

¹⁾ 『純粹理性批判』からの引用については、慣例に従い原典の初版、第二版の頁数を‘A…’‘B…’で記すことにする。但し厳密さを要求される箇所についてはアカデミー版の巻数と頁数を、また行番号も付記することにした。他のカントの著作についてはすべてアカデミー版の巻数、頁数（行番号）で表すことにした。また本稿でよく引用するカントの著作は次のような略号で表すことにする：

『プロレゴメナ』……………Prol.
『実践理性批判』……………KpV.
『道徳形而上学の基礎づけ』……………Gr.

²⁾ Vgl. XI, S. 395, Z. 18ff. (Brief an J. S. Beck) なおこの経緯については石川文康の論文「論争家としてのカント」（『現代思想、総特集＝カント』所収、1994年3月臨時増刊、156頁以下）に詳しい。